

理由の例文

例文1

今から3年前、集団リハビリでの内容が毎回同じで利用者様も飽きているのではないかと、内容を変えてみるけど大きな変化はあまり見られないことがありました。集団でやる意味があるのか効果に繋がっているかもわかりにくく、集団をうまくできるようになるまで、利用者様には待っててもらわないといけないのか...とどうしたらいいのかわからなくなってしまいました。

その頃はちょうどある介護施設に勤務している時期でした。集団で体操やレクを行っていましたが、利用者様に楽しんでもらえているのか、結果に繋がっているのかわからず悩んでいました。でも、やるからには利用者様に楽しんでもらったり結果に繋がられるようになりたくて模索していました。

しかし、現在行っている集団活動を始めた際は、雑巾縫いなんて何の意味があるのか、そればかりで他の活動はしないのか、針なんて危ない等のマイナス的意見が他職員から多くありましたが、他職員にも目的を共有することで、他職種からの集団活動の必要性も高まり、利用者様の満足度も高まっていきました。集団活動では効果判定が難しいですが、実施している際に通りすがりの他職種から利用者様へにこやかに声かけしている場面が増えたり、他職種の方も誘導を手伝ってくれたり、なにより利用者様の満足度が高まったことがとても嬉しくなりました。

今では利用者様から「ありがとう。この時間が楽しみだよ。またね」と言われたことがとても嬉しく、自信になり私も集団活動の時間が楽しみになっています。私が集団活動として行ってきたことは利用者様の生活に繋がっていたんだと実感できました。ですので、私は利用者様の満足度を高められる活動の提供を続けていきたいですし、多くの職員が利用者様の満足度を高められるサポートをしていきたいと思っています。

なぜなら、集団活動をスムーズに実施できるようになると、職員のストレス・業務負担の軽減だけでなく、職員が明るくいきいきとなり、利用者様にも伝染し穏やかな時間が過ごせるようになります。人生の大半を占めている仕事や生活の場が穏やかに過ごす時間が増え、多くの人が人生を充実して過ごすことに繋がると考えるからです。

例文2

今から2年前、一定の回数以上からのリピート率が低下することが起きました。結果も出ているがまだまだ改善しなきゃいけない課題はたくさんある。そんな状況にもかかわらず、痛みが軽くなったからもう大丈夫と考えられるお客様が多くいました。説明は十分したけれど何で理解してもらえないんだろうと考え、落ち込んでいました。

ちょうど、開業して間もない時期で、リピート率が低いことに悩んでいました。痛みや動きは改善し施術の結果は問題ない。それでもなぜかリピートしない。数回の施術では本当に必要なことを十分に伝えることが難しいため、自分がやってことはただの一時しのぎじゃないかと思ったり、無意味ではないかと思うようになり、施術の自信もだんだんなくなっていきました。

しかし、それは施術以外の他の部分に目を向けると改善することができました。現状では結果は出ているため技術面には問題ない。そのため会話や接し方に問題があると思い、コミュニケーションや心理、営業、行動経済など整体とはジャンルが違うようなことを学び始めました。その結果、リピート率が改善し、継続的にアプローチすることができるようになったので、お客様の痛みや動きなどの身体機能も大きく改善しています。

この経験で一方だけでなく様々な目線で物を見るようになり、施術の幅が広がるだけでなく、その人1人ひとりの気持ちを理解し、適した接し方をすることでより深い悩みや問題を話してくれるようになりました。そのことで更に深い施術ができるようになっていきます。

今では、お客様に「痛みを気にして動けるようになった」「毎年4回はギックリ腰になっていたけど先生の所に通い出してからは一回もギックリ腰になっていない」言われて喜ばれていますなど。

ほとんどの人達が痛みなど不調を抱えながら生活しています。そんな状態ではプライベートも余裕はないし、仕事の生産性も低いことでしょう。ましてやなにか新しいことを始めようなんてそんなエネルギーは無いでしょう。私の整体や知識を通して本当はもっと快適な人生を送ることができるということを1人でも知ってもらうことで、理想の生活、人生を送る人を増やしていきたいです。

例文3

今から15年前、自分の担当の患者さんのリハビリに関して、先輩がつつらと的確なアドバイスをくれたことがありました。

自分の担当の患者さんで、脳梗塞片麻痺の方に、短下肢装具の作製を検討中でした。私は何回もみさせてもらっていたのに大した評価やリハビリはできず、1回だけみた先輩がどんどの確かな評価をして、良いアドバイスをくれました。患者さんにとっては良かったことだと思うし、今思うと初めての装具作製だったので、何も分からなくて当然だったかもしれないと思いますが、その時はとても悔しく、柄にもなく陰で泣いてしまいました。

理学療法士になって1年目の時で、自分より他の人が患者さんのリハビリをやった方がよくなるのではと悩んでいました。正直、今も、多分これからも、完全にその思いが消えることはないかもしれませんが、だって周りにはすごいな～と思う理学療法士がいるので。

しかし、ふと気づいた時に、1年前にはできなかったことがいつの間にかできるようになっていたりすると、自分でびっくりするのと同時に、自分もやればできるんだと嬉しくなります。例えば全く分からなかった装具作製時の評価や、どんな装具を作ればよいか。今では自分でしっかり分かるし、何なら人にアドバイスすることだってできます。当時悔しい思いをした、あの先輩のようになれています。

その経験から、今はできなくても、それを勉強したら自分もできるようになるかもしれないと考えられるようになりました。その時は、分からないことや、患者さんが良くならないことに悩んだり、自分の力不足を感じるかもしれませんが、なぜ？どうして？を考えることをやめずに自己研鑽を続け、それを利用者さんに還元することを繰り返していくことで、自己成長や患者さんの状態の改善に繋がると信じています。

今では、利用者さんに「西山さんがいい」「できればあなたにずっと来てほしい(訪問リハの利用者さん)」と嬉しい言葉を頂いています。

今後は、今までやってきた理学療法士のスキルと、ピラティスの要素を掛け合わせ、不良姿勢や感情が理由で身体に不調をきたしている人の役に立ちたいと思っています。

不調をきたす前、もしくは不調をきたした後にでも身体を整えられる手段がある(自分でセルフエクササイズができる。頼れる人がいる。この人に任せておけば大丈夫と思える人がいる)ことは安心にも繋がると思います。

ピラティスの素晴らしさを広めていきたいと思っていますが、ピラティスは万能ではないので、ピラティスと理学療法士としてのスキルをフル活用して、不調で悩んでる人、姿勢改善をしたい人、ボディメイクしたい人の役に立ちたいと思っています。